第 22 回連続講演会

荒川支流　旧芝川に学び、野川を考える旅～河川再生活動が生み出す環境学習～

講演２ 野川ほたる村の活動

彦坂和夫氏 野川ほたる村村長

■かつての野川

みなさんこんにちは。はるばる東京からやって来ました。東京と言いましても、野川というところなんですが、実を言うとかつての野川は、こちらの芝川のようなヘドロの川になっちゃっていたんです。まずは昭和 30 年代頃、小金井も都市化が進みまして、田んぼや湿地を埋めて家を建てるようになって。そうした中で、こちらと同じように下水道管理をしてなかったから雑排水が入って、川は汚れていったんです。その時から、田んぼもできなくなった。後で山田さんに田んぼの話をしてもらいますが、田んぼをやっている方々たちも、東京都に（土地を）売ったんで、自然がどんどん失われていきました。

そんな時、ちょうど 22 年前に、東京都の野川公園の所長が「田んぼを作ってホタルをやりませんか」、ということを言うとったんです。私も絵を描きながら、自然がなくなり、こないだ描いてたはずの松の木が松くい虫に食われて、あれ、こないだの絵と違うんじゃないんか、と困ったりして。絵を描く以前と環境が変わってきたから、自然に対する思いも生まれて。それで、自然保護に足を入れたのが、2 本立ての生き様になって、野川ほたる村を作るという結果になりました。

■野川ほたる村の発足

ほたる村の発足は 1985 年に東京都の野川公園にホタルをということで、始まりました。で、1 年間準備期間の中で、どうしてホタルをやるんだと、あるいは、どういう環境でやるんだという研究をやりながら、アンケートなどを作って、周りにいる自然保護団体とか市民団体を呼び集めました。設立の時には、私らを含む 1、2 団体が、東京都と共催の公園開園に至ったんですね。今で言う「共同」と言うやつです。そのころは市民参加といいました。まぁ、そんなことのはしりを 22 年前にやって設立に至ったと。そんなことで、実際そのホタルのことなんですけど、府中の方から幼虫をいただきまして、今言った里親をやったんですよ。ほたる村の人たちと東京都の公園の方と一緒に（ほたるの）幼虫を各家庭に分けました。で、いっしょくたに放流した。ところが、公園の中の湧水が枯れてしまっていた。それで、私らはショックだったですね。湧水が枯れるちゅうことは夢にも思ってなかった。ところが、ホタルをやったことで、都市化の進展で湧水が枯れるんだという事態に気がついたんですね。これに私は慌てまして、水道水を引っ張ってきて、幼虫を助けなければならなかった。そんなことで、湧水がいかにわれわれの生活から遠くなったということに気がつきました。

この野川沿いには、かつて我々の先祖が縄文時代から湧水を頼りに住んでたことを示す遺跡があります。こないだも、八市のサミットをやりました時、国分寺の市長がなぜ国分寺が全国にあるんだろう？と言ってました。国分寺と言うお寺に行くには、やっぱり住みやすい街。府中に近い、行政に近いということもありましたけど、やっぱり、湧水を中心に町ができた、部落ができた。で、そこにお寺ができたのだろう、と。われわれの先祖も湧水を頼りにしていた時代があったけれども、我々は水道水と言う便利な物のためにですね、湧水を忘れてしまったことに気がつきました。ホタルに教えられた現状でした。その後、ほたる村の方としましては、湧水を保全しなきゃならないと気がつきまして、湧水祭りを提唱しました。湧水祭りは各流域、国分寺から始まり、小金井、三鷹、調布、狛江、世田谷と５市１区ですけど、そこに一つずつ訪ねては、湧水の保全の働きを行政と共に、やってきました。やってるうちにですね、地下水が実際どうなってるんだと、それは、ホタル以前にもう、水門学ちゅうことで、地下の水の流れなんかがどういう構造になってるかちゅうことまで、勉強せざるを得ませんでした。

■野川ほたる村の活動

ほたる村の流れは、ホタルをシンボルとしながら、周りの自然環境を守ろうというものです。近年は、緑の消失とかだけでなく、ナショナルトラストまでしなきゃならない状況にきております。近隣の人たちに呼び掛けると、町会が動き出した。それで行政も動き出す。やっぱ、市民が動かないと行政は動かないということですね。私らも、「枯れる野川を何とかしてほしい」という素朴な願いから、東京都に陳情をしました。その結果、都議会では最初は否決されました。なぜかと言うと、玉川上水の水を引っ張ってくるということを本文にいれたことにあります。その後、玉川上水に水利権が残っているから、というように書き直しして再陳情したら、みごと通りましたよ。それから、3 年後にやっと方向付けが決まりました。国分寺界隈には、3 本の湧水があったんです。その一本が姿見の池ちゅう所の池の周辺で、JR さんが地下水を切って地下道を掘ったために、そこへ全部水が流れ込んでしまう。で、困った JR さんはその水をポンプアップして、下水道に流したんです。それで、年間２億円ほどの料金を JR さんは国分寺に収めている。そういう現状の中で、国と都と国分寺市、3 市が１億何万円、全部で、３億６千万位経費を出して、湧水が切れないための姿見を再現につなげました。そこで、私らの陳情が大変な功を得たと、そういうことで私らは開通式に招待されました。

だから、民間の市民運動と言えども、願いが素朴でほんとに資源があるならば、通るんだなと。私らの小さな市民団体ですけど、一つの波及した効果から、これが正解なことだったと、自負にしております。

そういうことで、野川が潤うという状況を喜んでいましたけど、（水が）ない時はない。その問題を、ここ１，２年うちの事務局長の山田さんが水利調査をやっております。その結果、野川の水位の変化、変動もわかりました。ただし、変動はわかっても、本当にその解決には雨水がいちばん最高なんですけどね、雨が降りゃなんてことはない。ない時にどうするかっていうことを今後の課題にしてですね、浸透枡をもっと増やせという運動があります。小金井市は浸透枡を世界一多く使っている。小金井では浸透枡に雨水を貯めて、地下水に流す運動をしていながら、もう５万機も作ってるんですね。それなのに、地元の小金井には水が流れてこない。どうも下流の三鷹の方に流れているらしいと。水門学は見えない世界ですから。要は、（この地下水を）大地に返すことが、大事なんですね。

かつての小平の人に言わせると、畑が最大の浸透枡だよと、あとは山林とか畑。それを都市化したから浸透枡と言うしょうがない方法をとっておりますけれども、本来は自然の木が保水し、畑が水を吸いそれが、徐々に地下水を貯めていくと。要するに、銀行で言うなら、預金しても湧水なんて利息みたいなものですね。完全に均等な利息が出るのが、環

境のためには雨水をどう涵養するか、だから、都市農業を大事にしなければならない。しかし、どんどん都市農業が減っております。この辺も都市農業は？（会場に聞く）ねぇ。これまでの話にあるように、これからも自然保護に対しては闘っていけると思います。つい最近のほたる村の方の動きとしては、川の運動から、調節池と言うものを洪水のために造りました。そこへ、たまたま雨が多い時に、水が溜まりまして、それを見たほたる村の少年がここを保全の場にしようということを言い出したんです。それはいいけど、なくなったらどうするんだと（言ったら）、そしたら、井戸でも何とか作ればいいじゃないかと言うことで、井戸も掘っていただいて準備してありますけどね。

国の法律もどんどん変ってますが、私らもいつも法律以前に動いてましたから、我々が法律を動かしているんだという、うぬぼれもありますけども。少なくとも、気がついた市民が、声を出してください。その結果調節池に雨水が溜まったから、保全の場にしようという活動を１０年来やってきました。かつて田んぼだったところに田んぼを作って、そこに稲をしようと。ほたる村は、もう、15，16 年来稲苗を無料配布しています。山田さんが今田んぼを中心にやってますけど、そういう自然学習を小学生ではしていく。我々がやったこの自然を侵していった罪を繰り返さないよう、我々の生きている間に子孫に残すためにやらなければならない。そのためには、少なくとも田んぼ。コンビニに行けば御飯がある。そういう風な子供の認識をなんとかね、田んぼと言う土台のところがあって、米が作られて、我々の食生活が成り立っている。それで、自然再生法ができるちょっと前に東京都にお願いしました。その願いがかなって、自然再生法から 4 年目に田んぼが出来るのが実現するところまできました。ほんの猫の額のような田んぼです。昔の田んぼを知っている人が見たらね、こんなものでもね、私たちとしては大いによかったなぁということで生きがいに思っております。

じゃあ、自然再生法のその後の方を、山田さんにバトン代わります。

山田健二氏 野川ほたる村事務局長

■野川の概要と自然再生法に基づく田んぼの設立

それじゃあ、ちょっと先に戻って、野川というのはどこにあるかというと、国分寺市、小金井市、調布市、狛江市、世田谷で多摩川に合流するというわけですね。日立中央研究所と言う場所の中に池がありまして、そこを水源として世田谷区で多摩川に合流します。長さが 18.8 キロの一応一級河川です。野川の川の状態はどうなってるかというと、昭和 50 年前くらいまではある程度水はありました。そのあと下水道が普及して、流れ込む水がなくなった代わりに、汚い水が流れ込まなくなったので、水質はよくなってきています。昭和 45 年を境に田んぼづくりはなくなってしまいましたが、その頃の、田んぼの水がすごく汚くて、嫌な臭いがしていました。それから、もう一つは都市化ですね。都市化に伴って湧水も減少してるし、あるいは、もうなくなった所もあります。それで、水がさらに少なくなった。それから、農耕の水が玉川上水からきてたんですけども、それも止められてしまって、さらに水が減っているような状態です。それが、水量とか水質に関する野川の様子ですね。それから、工事なんですけれども、洪水対策として、三鷹市に防水池を作ったり、小金井市に第一・第二調節池を造りました。さらに、大雨の時に瞬間的に水が流れ込みますので、水を早く流すために、曲がってた川をまっすぐにしました。今小学校の下にトンネルを掘って、まっすぐに川を流しています。それから、小金井には原っぱがあるんですけども、これもまっすぐにされました。

野川の水がどれだけ少なくなったかといいますと、これは今年の 2 月の終わりから 3 月の初めなんですけれども、底が見えて水がありません。普段はちょっとたまってますけども、これが水切れといわれるまでまったく水がなくなりました。これは野川全体ではなくて小金井市のある区間だけがこうなりました。水があった時はこんな遊びをしていてたという（写真を指しながら）。それで、先ほど（彦坂氏が）説明しました、いろんな陳情をしまして、その結果、どじょう池という池ができたんですね。さっき言った武蔵野線の地下水なんかがここに流れてくると。それから、今言ったいろんな陳情してきた結果でもって、自然再生法が今できていると思います。

この自然再生法は、平成 17 年に協議会というものが設立されまして、市民と行政が一緒になっていろんな検討をしました。その結果平成 19 年に田んぼが設立されました。広さははですね 130 平米ほど。これが先ほど言いました田んぼで、これが昨年の田植えの様子です。この時はお米が 43 キロとれました。今年はちょっと減って 25 キロぐらいですね。現在どうなっているかと言うと、今年は雨が多くてかなり水が増えています。これが昨年のものですね。水質に関してはですね、割ときれいなんですけども、一応ちょっと調べておりますけれども、市販されている試験紙を使ってみると、pH はだいたいほぼ中性ですね。弱酸性ですけれどもほぼ中性ですね。硝酸塩は確認されておりませんけども、アンモニアとか亜硝酸はごく微量で魚とかの生息には全く影響がないというような結果です。以上で終わります。